14 急性腹症で発症した8歳女児後腹膜嚢胞状腫瘍（リンパ管腫）の手術例

内山 昌則・村田 大樹・長谷川正樹*
武藤 一朗*・青野 高志*・岡田 貴幸*
窪田 正幸**・大滝 雅博**
県立中央病院小児外科
同 外科*
新潟大学小児外科**

症例は8歳女児，2日前より下腹部痛があり，増減を繰り返したため近医を受診し当科を紹介された．白血球13600，CRP 7.4と炎症反応増，腹部XPで左下腹部に無ガス野，CTでは後腹膜を中心に骨盤部に至る腫瘤像をみとめた．左側腹部に圧痛と反跳痛，筋性防御を認め入院とした．後腹膜原発のリンパ管腫に炎症が波及したためと考え，炎症の消退を待ち手術することとした．抗生剤を投与し6日目には白血球5200，CRP 0.4と改善し症状も軽快した．入院9日目手術を施行した．腫瘍は後腹膜に広くはっており，小腸や結腸間膜に及んでいた．剥離を進めた所，頭側では十二指腸の壁に腫瘍が及んでおり十二指腸漿膜筋層を一部切除し，摘除術を行なった．腫瘍は多胞性で組織はリンパ管腫であった．腹部リンパ管腫の治療は摘除術が原則だが，部位によっては腸管大量切除を要する場合もあり，腸管切除を回避するため部分切除に硬化療法や開窓術を行なう報告もある．最近，腹腔鏡手術例も報告されているが，本症では腫瘍が広基性に後腹膜に存在しており開腹術を選択し切除を行なった．

15 骨盤内馬蹄形腎を伴った腹部大動脈瘤の手術経験

葛 仁猛・杉本 努・飯田 泰功
島田 晃治・山本 和男・吉井 新平
春谷 重孝
立川綜合病院心臓血管外科

馬蹄形腎は，左右の腎臓が峡部により結合している先天性奇形で発生頻度は600人に1人とされている．腎動脈や尿管の異常等のバリエーションがあり，腹部大動脈瘤の手術の際に，その温存や再建が必要となる場合がある．

症例は68才男性，既往に糖尿病，高血圧あり．腹部拍動性腫瘤に気づき，CTで馬蹄形腎を伴う腹部大動脈瘤と診断された．MDCTでは腎臓がL字型を呈しており，骨盤内，両総腸骨動脈前面に存在した．さらに腎動脈は動脈瘤自体から分岐していた．手術は腎保護のため腎動脈に右腋窩動脈から一時的バイパスを置いてY型人工血管で再建した．

馬蹄形腎は尿管，動脈の変異が多く，その確認のためMDCTが有用であった．

16 大量胸水にて発見された巨大縦隔神経鞘腫の1手術例

篠原 博彦・有村 隆明・中山 卓
岡崎 裕史・矢澤 正知
県立中央病院呼吸器外科・心臓血管外科

症例は20才女性．2005年5月に経膣分娩にて出産していた．同年7月感冒様症状出現したため近医受診，内服治療を受けるも改善せず．胸部X線写真にて左胸水貯留を認めたため当科紹介入院した．胸部CTでは左肺はほぼ完全に虚脱し，左後縦隔に径8cm大の腫瘤を認めた．直ちに胸腔ドレナージを行い，淡血性の胸水約3700mlを排液した．胸水細胞診ではclass Ⅳで腺癌が疑われた．その後CTガイド下生検施行し，神経鞘腫（Antoni B）の診断であったため，8月開胸下に腫瘍摘出術を施行した．術後経過は順調で，現在まで再発は認めていない．大量の胸水を伴った神経鞘腫の報告例はほとんどなく，若干の文献的考察を加えて報告する．